

現代アメリカ口語イディオム、その起源・由来、ニュアンスと使い方

小山内 大*

Phrases Coined in the USA and Their Origins, Meanings and Usages

OSANAI dai*

キーワード：英語イディオム、英語口語表現、アメリカ、大衆文化、西部開拓史

はじめに

アメリカを起源とする英語イディオムは概ね 19 世紀の西部開拓時代前後から英語圏に広まり始めたが、20 世紀初頭からの国際社会での米国の政治的な優位性と共に、アメリカ発の大衆文化とその後の大量消費社会の世界的な広がりが、米国を起源とする英語イディオムの汎用と密接に繋がっている。

英国に比べ米国は文化的な後進国と見なされていたが、第 2 次大戦以降の大量消費社会の到来と共に、映画・ミュージカル・テレビ・スポーツ・ジャズやロック等のポピュラーミュージック等など、米国発の大衆文化は世界的なサブカルチャーに支配的な影響を及ぼして来た。さらに 60 年代を象徴する宇宙開発、70 年代以降のパーソナルコンピュータの台頭、その後のインターネットの大衆化など米国主導のテクノロジーによって、アメリカ発の英語は（単語・イディオム・文法・発音に至るまで）、既存のイギリス英語のバラエティーに取って代わるスタンダードとしての役割を果たして来た。

本研究ノートでは米国を起源として英語圏で大衆化したイディオムを取り上げ、ジャンルに分けて代表的なものを紹介し、その起源・由来、使い方及びニュアンスを説明する。

[1] 西部開拓時代及びアメリカ先住民に由来するイディオム

1.1 acid test「試金石」「厳格な試験・検査」

このイディオムの起源はカリフォルニアで起きたゴールドラッシュに遡る (Stanley J. 2011)。このイディオムでの acid は nitric acid「硝酸」のことである。現在と同様、当時も「金」は高額で取引されていたので、悪徳な商人達は、金に似た鉱石（鉛・黄銅）や表面に金メッキを施した鉄などを本物であると偽り取引業者を騙すケースが多発したことから、本物の金かどうかをその場で判断するために、acid test（金に硝酸をかけて変色すれば偽物）を用い、この簡易な方法が取引業者の間で一斉に広まった。金は化学的に不活発なために、硝酸をかけても色が変わらないので、金に似た卑金属と簡単に区別が可能になった。後に acid test は「厳格な試験」や「厳しい検査」、また「試金石」という意味の比喩として、広く一般に使われるようになった。特にビジネス界では品物の「品質や信頼性を確かめる厳格なテスト」という意味で使われている。

1.2 bury the hatchet「仲直りする・和睦する」

このイディオムはアメリカ先住民の部族、Iroquois「イロコイ族」の習慣に由来する。bury the hatchet の直訳は「斧を埋める」である。hatchet

* 理工学部共通教育群准教授 Associate Professor, Division of Liberal Arts, Natural, Social and Health Sciences, School of Science and Engineering

とは狩りや戦闘で使われた tomahawk「トマホーク」と呼ばれる石斧のことで、争いを起こしている部族の首長が、互いの和睦の印に、武力の象徴である斧を土に埋めた儀式に由来する Flavell (2001)。ヨーロッパを中心とする西洋社会にアメリカが国家として興亡してきた 18 世紀以来「和睦する・仲直りする」という意味の比喻で使われてきた。現在では、実際の武力衝突以外にも、衝突の危険を伴う緊張状態や、感情的な対立にも使われる。

1.3 keep an (one's) ear to the ground 「情報や動きに注意する、動向を見守る」

an ear to the ground「地面に耳を付けて」は文字通り、アメリカ先住民が、バッファローの大群が移動する時の地鳴りを、地面に耳を付けて聞き分けていたことに由来する。しかし、西部開拓時代に入ると、白人で組織する騎兵隊と先住民の衝突が激化。先住民達は馬に乗って攻め入って来る騎兵隊の大群を、地面に耳を付けて事前にキャッチしたことがこのイディオムが英語圏で使われ始めたきっかけである (ジャン・マケーレブ、安田一郎 1983)。また、戦闘には関係なく、カウボーイ達のガイドをしていた先住民が、絶えず群れで歩き回るバッファローの所在を教えたという説も起源として有力である。現在では、社内や組織内の人事などに「情報網を張り巡らす」、市場経済の「動向に注意する」等の意味で用いられることが多い。

1.4 (on) the wrong side of the tracks「貧困地区 (スラム街)・下層階級」

起源は 19 世紀の西部開拓時代に遡る。当時は蒸気機関車が主要な輸送手段であり、多くの西部の都市は鉄道を中心に繁栄し、鉄道の線路 (tracks) を囲むようにその両側に町が広がっていた。wrong side「反対側」とは、金持ちや教育を受けた富裕層が住む、穏やかで治安が保たれた地区から見た反対側のことで、貧しい者達が多く住む治安が悪い地区 (スラム街) または下層階級を意味した。現在では、貧しく恵まれない階層の出身であるが、多くの困難を乗り越えて、社会的に成功するサクセスストーリーに使う場合が多い。

1.5 famous last words「また、始まった・よく言うよ・それはどうかな?」

このイディオムは、もともと「(偉人や有名人達が死ぬ際に残した) 最後の言葉」という、そのままの意味で使われていた表現である (Dent 2012)。現在使われているような皮肉の意味が付け加えられたのは、John Sedgwick (ジョン・セジウィック) 南北戦争時の北軍の総指令官の最後の言葉に由来する (Stanley J. 2011)。

彼は 3 度銃撃を浴びながら、その度に運良く生き残り不死身としてアメリカ国内に名を馳せていた。しかし、最前線で指揮をとっていた彼は、“They couldn't even hit an elephant from this distance.”

「こんな距離からは、象を撃っても当たりはしない」と言った瞬間に、敵の狙撃手に射殺された。彼のこの最後の言葉は (famous last words) は、「事実と異なることや非現実的なことを言う」というニュアンスで使われるようになった。以来、自慢話や得意げな発言をする者に対して、「さあ、それはどうかな?」「無理だろうな」「また始まった」等の否定的なニュアンスをユーモアを交えて表すのに格好なイディオムとして好まれている。

[2] 映画・テレビ・文学等の大衆文化に由来するイディオム

2.1 cut to the chase「短刀直入に言う」「さっさと話の本題に入る」

ハリウッド映画に由来する表現である。このイディオムでの chase は「映画での追跡シーン」のこと、cut to the chase の直訳は「追跡のシーンまで途中を飛ばす」である。20 世紀初期の映画はサイレントムービーが主であったが、当時の典型的なストーリーは、お決まりのダラダラと続く長くて退屈なロマンスシーンの後に、スピード感に溢れた馬車での追いつ追われつの chase「追跡」シーンになった。猛スピードで走る馬車上でのガンマン同士の生死をかけた撃ち合いは迫力とスリルに満ちていて、映画の後半に挿入されるこのシーンが映画のハイライトでもあった。つまり cut to the chase とは本来「最も躍動感と迫力に満ちた馬車でのチェイスのシーンまで、つまらない場面を飛ばす」という意味

である。現在では「短刀直入に言う」「回りくどい説明や、重要ではない話題には触れずに、本題に入る」という意味の比喩として、また会議中に「さっさと本題に入ろう」等の意味に使われている。

2.2 Seven year itch「浮気心」「倦怠期」

the Seven Year Itch は、1955 年に公開された Marilyn Monroe（マリリン・モンロー）主演映画のタイトルで、邦題は「7 年目の浮気」。映画公開以来、世界的に人気を博し、一揆に英語圏で使われ始めたイディオム（婚姻関係にある男女の浮気を描いた作品—彼女が地下鉄の排気口の上に立ってスカートを押さえるシーンは有名）Stanley (2011). seven year itch の本来の起源は映画のタイトルではなく、19 世紀にアメリカやヨーロッパで広まった、顔や体に赤い発疹が現れる伝染性の皮膚炎の呼び名で、通常は婚姻外での性的関係を介して移る不名誉な病気。20 世紀に入ると薬剤で治療できるようになったが、それ以前は数年間発症し激しい痒みを伴う病であった。しかし社会的には、婚姻外での反倫理的な行為をした者（特に男性）に対する当然の報いであると認識されていた。

2.3 Catch-22「ジレンマ・板挟み・矛盾した状態」

この有名なイディオムはアメリカの作家 Joseph Heller が 1961 年に発表した Catch-22 という同名の小説に由来する（Dent 2012, Flavell 2006）。第 2 次世界大戦中、イタリアに駐留していたアメリカ人パイロットの Yossarian（ヨサリアン）を中心に書かれた物語である。主人公はアメリカ空軍爆撃隊に所属する爆撃体長、彼の同僚の Orr（オール）も爆撃手で毎日除隊になること夢見ながら爆撃隊に向かっていた。軍規第 22 項には「狂気に陥ったものは自ら請願すれば除隊できる」と定めがあり、Orr は自分が精神異常であることを申し出たのだが、自分の狂気を認識できるのであれば、精神的には正常であるという理由で除隊の請願は断られた。つまり正常な神経を持っていたとしても精神を患っていた、結局は戦場に向かわなければならなかった。以来、「どっちに転んでも勝算のない不条理な状況」や「身動きがとれない板挟みの状況」や「ジレンマ」

を Catch-22 と呼ぶようになった。このイディオムでの catch は罠・落とし穴という意味である。

2.4 kiss of death「命とり・致命傷・悪夢」

直訳は「死のキス」である。このイディオムからは、マフィアのボスが、これから殺害することを予告するために、その相手にキスをするシーンが頭に浮かぶが、聖書の中のマルコによる福音第 14 章第 44 節（Mark14:44）に由来する表現である。Now His betrayer had given them a signal, saying, “Whomever I kiss, He is the One; seize Him and lead Him away safely.”「イエスを裏切る者は予め彼らに合図をしておいた。私が接吻をする者がその人だ、その人間を捕まえて引っ張って行け」

聖書の中のこの部分は「ユダの死の接吻」とし知られており、キリストが 12 人の弟子達と最後の晩餐を共にした後、キリストを捕まえに来た男達に、弟子のひとりのユダが「私がキスをする相手がイエスだ」と密告し、イエスは囚われの身になる場面は有名。イエスにとって、ユダから受けたキスはまさに the kiss of death「命とり」になったわけである。

直接の起源は聖書にあるが、このイディオムが広まったのは 20 世紀になってからで、Kiss of Death というエリザー・リプスキ（Eleazar Lipsky 1911-1993）原作の同名の小説が人気を博し、後に数回に渡り映画化やテレビドラマ化されたこと、またギャング映画の中で印象的なシーンとして使われてきたことなどが一般化した理由である。

2.5 blond bombshell

Jean Harlow が主演する 1933 年公開の映画 bombshell（邦題「爆弾の頬紅」）に由来する表現である。1930 年代ハリウッド映画で活躍した、セクシー女優 Jean Harlow「ジーン・ハーロウ」は、この映画の公開により、blonde bombshell「ブロンドの爆弾」と呼ばれるようになった。この映画は当初は単に bombshell「爆弾」というタイトルでアメリカで公開され、人気を博した後イギリスで公開された。しかし bombshell というタイトルは「戦争映画」では？と誤解を招くという心配から blonde bombshell に変更して公開され、この表現はたちまち英語圏に広がった。

日本とアメリカでは魅力的な女性・男性について見方の違いがある。女性らしさは凹凸のあって美しい曲線がある体形、男性は筋肉質で肩幅がありガッチリした体形が好まれる。従って女性の体形を褒める意味では *thin* 「細い」は敬遠される。その代わりに *slender* か *slim* を使うと曲線があり美しく痩せているといニュアンスが伝わる。

[3] 宇宙開発やテクノロジーに由来するイディオム

3.1 All systems (are) go 「全て準備完了」

アメリカ航空宇宙局 (NASA) 由来のイディオムである (Flavell 2006, Dent 2012)。この表現での *go* は形容詞であり、*ready* 「準備ができています」と同じ意味である。おそらくこの表現は NASA が Apollo Project (アポロ計画＝人類初の月への有人宇宙飛行計画 1961～72) に邁進していた時代に使用され始めたものであると推測できる。ロケットの打ち上げ前には大勢のエンジニアや管制官達が準備のための念入りのチェックを施し、すべてのシステムが正常に作動していることを確認した時点で “All systems are go.” 「準備完了」という合図と共に、*count down* 「秒読み」が開始された。

このキャッチーで、歯切れの良い口語表現は、直ぐにビジネス界や一般の人々の間に広まり、今日までそのままの意味で使われている。*countdown* 「秒読み」や *lift off/liftoff* 「発射(する)」なども NASA 由来の表現である。

3.2 rocket scientist [凄く頭がいい人・金融スペシャリスト]

rocket scientist は 20 世紀後半からアメリカで使われ始めた比較的新しい表現である (Dent 2012)。1969 年に人類が初めて月面に降りたように、20 世紀を代表する科学・技術の進歩のイメージを代表していたのが *rocket science* (宇宙工学) である。*rocket scientist* にはアインシュタインのように典型的な風貌を備えた昔ながらの学者のイメージと結びついている。一般的にこの表現は *You don't have to be a rocket scientist to ...* または *It doesn't have to take a rocket scientist to ...* 「～

をするのにロケット科学者である必要はない＝～をするのに頭がいい必要はない」という否定形で使われる。(例) *You don't have to be a rocket scientist to figure out such an easy math question.* 「こんなやさしい数学の問題を解くのに頭がいい必要はないんだよ」

[4] スポーツに由来するイディオム

4.1 down to the wire 「最後の一瞬まで、期限や締め切りが近づいて」

down to the wire の直訳は「ワイヤーに至るまで」で、競馬に由来する。競馬ではゴールの寸前まで勝敗が分からないことが多く、現在では写真判定 (*photo finish*) やビデオ判定が使われているが、写真による判定が可能になる以前は、肉眼で確認していた。

この表現での *wire* は馬に乗った騎手達が通過するゴールの真上に張られた針金を意味する。競馬場の職員がこのワイヤーの上からゴールを通過する馬を凝視し、接戦の場合でも正確な順位を決められるように工夫していたのです。*down to the wire* は 2 頭の馬が競い合ってほぼ同時にゴールに駆け込み、勝敗の行方は上に張られた「ワイヤー」のところまで持ち越されるというギリギリのニュアンスが伝わって来る表現である。

このイディオムは「最後の一瞬まで」という意味の比喩として用いるが、「最後の最後までやり抜く (諦めない)」というニュアンスを含む (*do one's best right down to the wire*)。また「仕事や試合等が終わりに近づく」等の意味にも使われる。通常 *come, get, go* を前に伴う。

4.2 jump the gun 「早まった行動をする・フライングをする・勇足をふむ」

陸上競技に由来するイディオム、20 世紀初頭から使われ始めた。Stanley J. (2011)。このイディオムでの *gun* は陸上競技でのスタートの合図として使われているピストルのことである。短距離走ではスタートが勝敗を分けるほど重要なので、ピストルの合図の前に飛び出す者が出る。このイディオムでの *jump* は「途中を飛ばして進む」という意味であ

り、jump the gun は「スタートの合図であるガンの合図を無視してスタートする」という意味である。最初は、陸上競技の中で使われていたが、後に「早まった行動をする・早とちりをする」という意味の比喻として一般に広まった。ちなみに日本語では jump the gun と同様な意味として、フライングが使われるが、これは和製英語である。多分「flying start」という英語表現に由来していると思われるが、これは「飛び出すような最高のスタート」という意味である。

参考文献

Linda and Roger Flavell. (2001). dictionary of idioms and their origins. London: Kyle Books.

Robert Hendrickson. (2008). The Facts on File Encyclopedia of Word and Phrase Origins (4th ed.) New York, NY: Infobase publishing.

Albert Jack. (2004). Red Herrings & White Elephant. New York, NY: HaperCollins Publishers.

Stanley J. (2011). On the Origins of the Clichés & Evolution of Idioms. TN. St.Clair Pulication.

Judith Siefring (ed.) (2004). Oxford Dictionary of Idioms. Oxford (2nd ed.): Oxford University Press.